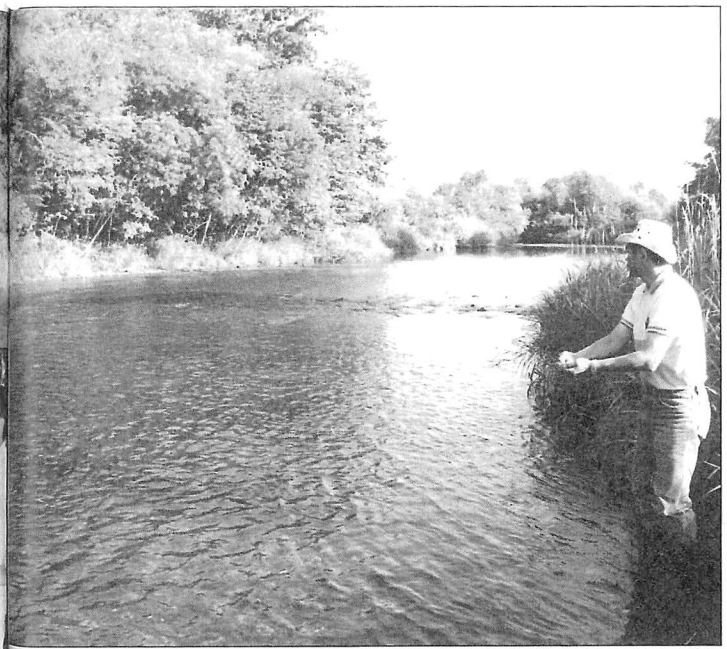
「脱ダム」への方向転換！治水と環境保全の両立を

地元の住民団体が「脱ダム」へ代替案

「数百億円を投じて建設されるコンクリートのダムは、看過し得ぬ負荷を地球環境へと与えてしまう。（中略）国からの厚い金銭的補助が保証されているから、との安易な理由でダム建設を選択すべきではない。

よしんば、河川改修費用がダム建設より多額になろうとしても、百年先、二百年先のわれわれの子孫に残す資産としての河川・湖沼の価値を重視したい。（中略）故に現行の下諏訪ダム計画を中止し、治水は堤防のかさ上げや川底のしゅんせつを組み合わせて対応する（後略）」



ダム予定地直下のサンル川は、下川町内で最も水量・水質の豊かな川だ。治水や森林などをテーマに住民団体と開発局との合同調査も行なわれている（写真左。97年）

これは二月二十日、長野県の田中康夫知事が発表した「脱ダム」宣言の一節。生態系を保全することの重要性を説き、国依存の姿勢を戒め、学者先生たちが好んで使う「費用対効果」の考え方を超えた、示唆に富んだ問題提起といえるだろう。

長野県は治水や利水の代替案を本格的に議論していく中で「脱ダム」を具体化させることになった。ここ北海道では、サンルダム計画に対して、既に地元の住民団体が「ダムに代わる公共投資について――天塩川水系の治水整備案」と題した代替案をまとめ、関係機関に実施を提案している。

一九九八年五月にこの代替案を示したのは、下川町の住民有志でつくる「サンルダム建設を考える集い」実行委員会（橋本玉吉代表）。同会は九六年に発足し、住民アンケートを実施したり、討論会や懇談会、現地調査など地道な活動をつづけてきた。

A4判二十五頁におよぶ天塩川版の代替案を要約すると、次のような内容になる。

「サンルダムは、岩尾内ダムほどの事業効果は得られず、地域振興や観光に対する波及効果も乏しい。これからの天塩川流域に必要な公共投資は『水』を中心にした、経済や環境を良くしていく事業。総合的な治水対策をはじめ水質の浄化、河川環境の復元、森林や三日月湖の整備、ソフト事業への重点投資が必要だ」

「ダムの洪水調節効果は乏しく、音威子府村付近などの一部に残る水害の発生は、ダムが完成しても解消できない。同村にある天塩川狭窄部の早急な手当てや内水氾濫対策、道路のかさ上げ、森林整備、遊水池づくりなどの治水対策こそ急務だ」

そして、水害個所のきめ細かな手当てと、サンルダムの十数倍の保水容量がある流域の森林整備などの治水対策が可能なので、これ以上の人工ダムは必要ない――として、「ダム建設を中止するほうが得策」と結論づけている。

この「治水整備案」は、いわば住民側からの「脱ダム」の具体的な提言であった。

公共投資をめぐり住民と国側が討議

同実行委は九八年夏、事業主体の道開発局に対して、代替案で示した遊水池の候補地や岩尾内ダムの現況などを一緒に調べるように提案し、合同調査などが行なわれている。

昨年一月には、「天塩川流域での公共投資のあり方」をテーマにして、継続的に討議の場を設けていくことで双方が合意。現在は、ダムと治水対策をめぐって質疑や意見交換を重ねている。従来型の公共事業に批判的な住民と技術者集団の開発局とが、特定のテーマをめぐって継続討議を行なうことは、「ダム関係では道内で初めて」（道開発局河川計画課）という。

九七年に改正された河川法は、これまでの治水と利水の役割に「環境」を加え、「住民参加」も盛った。こうした河川法の精神が現場に十分浸透するまでには至っていない状況があるが、個別事業をめぐって住民との継続討議の場を持つことにした開発局の姿勢は、ひとまず高く評価できるのではないか。少なくとも、地元住民がダム建設についての疑問点を尋ねても「議論はしたくない」などと言って対話の姿勢に乏しい、下川町の幹部よりは真っ当な対応といえるだろう。

実際の討議では「私たちの問いかけに対して、開発局の人たちから納得の

連載・転換期の公共事業 ㉖

天塩川水系サンルダムの投資効果を問い直す（下）

ルポライター 滝川 康治

サンルダム計画をめぐって、地元の住民団体は3年前に代替案をまとめて事業主体の道開発局などに提案し、いま「天塩川流域の公共投資のあり方」をテーマにして両者の討議が行なわれている。天塩川流域の新しい公共事業をどう進めていくのか――この代替案や討議の経緯を見ながら考える。

生態系の復元へ 新しい公共事業を

かつての水害地域はポンプ場などが整備され、住民の満足度も高い（名寄市内淵・天塩川左岸）

これからの河川公共事業は、大規模ダムに代表される従来型の手法から、各流域の福祉や安全、経済の向上に役立つものへと転換することが必要だ。その一つの柱として、かつての河川環境を復元していく公共事業をやってみてはどうか。

幕末の一八五七（安政四）年、丸木舟で天塩川内陸部を踏査した松浦武四郎の報文記録を読み進むと、場所請負制度の圧政下にあって崩壊寸前のアイヌ社会を支えていたのは、流域の山河と生態系が与えてくれた恵みだったことがよく分かる。

武四郎は、「ユペ」と呼ばれていたチョウザメについて、上流部に至るまでアイヌ語地名を書きとめ、現在の中川町や音威子府村では深い淵を紹介して「ここにもチョウザメ多し」と記している。天塩川のチョウザメは、丸木舟の上から突き道具を使って捕るさまが明治時代の記録に残っているし、大正期まで上流部での目撃例もあるが、相次ぐ河川工事などによって深い淵が減り、幻の魚と化して久しい。

数年前に上川・留萌両支庁がまとめた「天塩川清流プラン」のキャッチコピーは「蘇れチョウザメの踊る北の大河」である。このプランは、道や開発局、流域自治体、自然保護グループなどの代表が議論を重ねて作成された経緯がある。

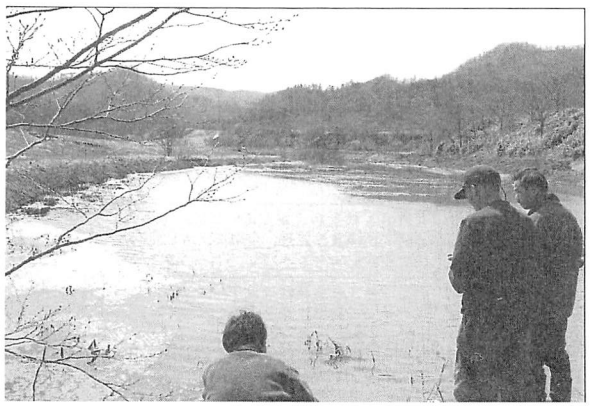
しかし、美しい言葉を並べたコピーはあっても、チョウザメが遡上できる川づくりに向けた本格的な議論は聞いたことがない。その一方で、川をコンクリートで固める時代錯誤のダム計画が進んでいる。矛盾していないか。

松浦武四郎の記録によると、踏査時に天塩川流域のコタンの数は十九カ所あり、ほかに伝承のもの十四カ所となっている。アイヌ語地名のなかには、サケ・マスの産卵場を意味する「イチャン」や、川底から湧き水が出ている場所を指す「メム」がある。郷土史関係者の調査によって、これらコタンの立地点近くにイチャンやメムが集中していたことが分かっている。

とりわけ、サンルダム予定地のすぐ下流の名寄川（天塩川の最大支流）には、こうしたアイヌ語地名が多い。まわりの森林が豊かで、ピヤシリ山系の火山岩地帯などから魚の産卵に適した砂利が供給された――といった好条件が、川に恵みをもたらしていた。天塩川の上流域を見ると、本流は岩尾内ダムによって自然河川とはほど遠い状態になっており、残された数少ない良質の河川が名寄川といえる。その上流部にダムを造ることは、天塩川に致命傷を負わせる結果を招くだろう。

サンルダムが天塩川の生態系にもたらす影響については、ほとんど何も分かっていないのではないか。流域の住民たちが事業主体の開発局から下流の生態系に関する説明（「○○という魚や植物が生息している」という類の話とは違う）を受けた、という話も聞いたことがない。

ここは、いったん立ち止まってダム計画を根本から見直し、「天塩川清流プラン」を具体化するためにも、復元のための河川事業を最優先させていってはどうだろうか。


◀中川町内の旧天塩川は汚れ放題。蛇行復元や清流化のための公共事業が必要だ

下川町内で開かれた「サンルダム建設を考える集い」(97年)

「治水」と「環境」が両立する河川事業

天塩川は道内第二の大河でありながら、上流域に人口二万人台の士別・名寄両市という小都市があるだけで、流域の全人口が十万人に満たないところに一つの特長がある。

「サンルダムで洪水を調節することで、下流の長い区間にわたって縦断的に外水位を下げる効果がある」と、道開発局はダムの治水効果を強調する。ずいぶん大雑把な話である。

ちなみに、過去最大の出水を記録した一九八一年八月の洪水時にサンルダムがあったと仮定すると、開発局の試算によって得られた水位の低減効果は、下流の名寄市などで十～二十センチ程度とされている。これを聞けば、多くの人は「何だ、そのくらいのものか」と思うことだろう。

もとより「水位が下がる」のと「水害が解消する」ことは同義ではない。水害個所ごとにその発生原因が違うから、縦断的に水位を下げても住民生活の安全が保証されるとは限らない。「縦断的に水位を下げる」手法にこだわれば、内水氾濫対策などが後回しにされることも懸念される。

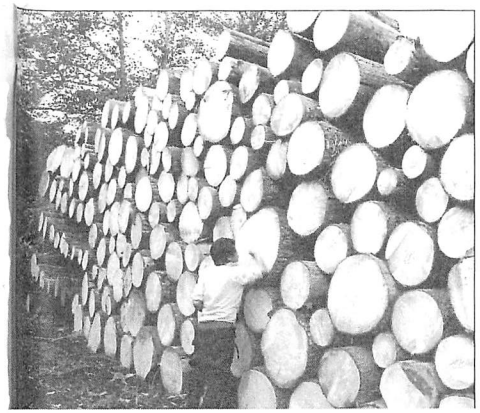
ならば、ここで思い切って「脱ダム」の方向に転換し、さまざまな治水対策を組みあわせながら流域の安全を確保するように、住民と自治体、国が一緒になって、真剣に知恵を絞るほうが得策ではないのか。

「治水」と「環境保全」はこれまで、対立する概念と思われがちだった。川をコンクリートで固め、川から人を遠ざけ、生き物が棲みにくい環境にする河川工事が大勢を占めたからである。

しかし、こうした見方も変える必要があるのではないか。

例えば、ふだんは農業を営んだり、公園として親しめる空間でありながら、大出水のときに洪水調節を行なう遊水池を造ることも可能である。

堤防の近くまで水田や住宅地が迫る石狩川に比べれば、天塩川流域には遊水池として利用できる空間が数多く存在する。そこで、一九三〇年代から七〇年代にかけて行なわれた蛇行部のショートカット工事で残った旧天塩川や、付近に住宅が少ない牧草地（かなりの面積がある）などのなかから、遊水池の候補地を具体的に絞り込んでいってはどうか。旧河道の蛇行を復元していくことで、河川環境を改善できて一石二鳥ではないか。


◀サンル川流域の約２万ヘクタールは大部分が森林。まだ大径木が残る